

2020年6月5日

## ジョバンニ・ボッカチオ著 平川祐弘訳 デカメロンについて

山口光恒



コロナウイルスによる5月中の在宅勤務のうち1日3時間ほどの読書時間でほぼ3週間かけて読み切った。文庫本（河出文庫）上中下、解説も入れると全部で1500頁ほどの本である。1351年、ボッカチオ38歳の時の著作で、物語の設定は市民の2/3がペストで死亡した1348年のフィレンツェとなっている。あまりのひどさにフィレンツェの貴族女性7名男性3名の計10名がペストから逃避する目的でフィレンツェ郊外の別邸で2週間ほど起居を共にし、それぞれが毎日一つずつの短い物語を語るという趣向である。週末を外して10日間で合計100の物語が披露される。

ペストとの関係は初日の第1話になぜ10名が郊外の別荘に集まったかの説明で触れているだけで、それ以外の99の話はペストとは一切関係が無い。しかしコロナウイルス関連の書籍が売れる中でこの地味な本が急に売れ出した。筆者はカミュのペストを読んだ後だったので、これに近い話がかかり出てくると思ったら全くそうではなかったというわけである。しかしAmazonで注文しても全く手に入らず（町の本屋は営業自粛で閉まっていた）、最初に届いたのが何と下巻で、これを読んでいる最中に娘がお茶の水の丸善で上と中を買ってきてくれたので、この順で読んだ。普通であれば下巻から読んでも意味は全く通じないが、一つ一つの物語が独立しているので、結果としてはどの巻から読んでも良かったわけである。

肝心の内容はほとんどが男女の愛欲物語（訳者の平川氏の言を借りれば五欲七情）と言って良いが、それが手を替え品を替えて語られる（筆者はこの本で当時は寝るときは男女とも丸裸だったと言うことを知った）。例えばあるときは妻が浮気をした現場をおさえられるが、機転を利かせて以降は旦那に文句を言わずおおっぴらに愛人と会えるようになったとか、**Situation** を男と女を入れ替えたような話、或いは不当な罪で流罪となり外国で暮らすこと数十年後に漸く疑いが晴れて元の市に凱旋するというまじめなものもある。こうした中で割に目立つのがカトリックの修道士の金と女への貪欲さの話で、例えば目をつけた既婚女性が教会に懺悔に来る機会を利用し、女に自分と悟られずに懺悔を聴いてその本心を確認したうえで女の行動を指図し、それによってまんまとこの女をものにするという類いである。本の執筆は正に **Quattrocento**（クアトロチェント、14世紀）のルネッサンス花盛りの時で、従来のカトリック教会の支配していた中世から人々が人間本来の活発さを取り戻しつつあった時期で、それまで絶対視されていた教会・僧侶に対する反発もあったのかも知れないが、デカメロン全体で修道士を痛烈に揶揄している。いかに時代が変わりつつあるとは言ってもやはり当時としてはかなりの覚悟が無ければこうしたことは書けなかったに違いないと思う。この点は半世紀前にフィレンツェを中心に活躍したダンテが、神曲に拠って法王庁を批判したのと通じるものがあるようである。

こうした政治的な点を除くと、男女の関係を中心とした本として昨年谷崎の翻訳で通読した「源氏物語」と好一対をなす。しかし紫式部はボッカチオより500年以上前にあの物語を書いており、英語をはじめとして何か国語かに翻訳はされているとはいえ、もし紫式部がこれをイタリア語（当時英語は全く小さな田舎の島のことばに過ぎなかった）で書いていけば、大変なベストセラーになっていたのでは無いか。

はじめに記したように一貫したストーリーの流れは無いので、小説を読んでいるような筋を追う楽しみは無いが、時間があったら読んでみてはどうかという類いの本である。

この本の楽しみは翻訳者のつける脚注と、合計146頁に及ぶ解説である。例えば解説の目次は次の通りで、これだけで1冊の本になる位である。

#### 第1章 西洋文学史上の「デカメロン」

- ・「デカメロン」が占める「くびれ」の位置
- ・「デカメロン」の魅力の普遍性
- ・詩人ダンテと散文作家ボッカチオの格差
- ・「神曲」と「デカメロン」にまたがる文化史的空間

#### 第2章 新訳にあたって

- ・既訳にまつわる諸問題
- ・ポリティカル・コレクトネスと「デカメロン」
- ・原作の語りの区分と訳文の文体の区分について
- ・翻訳底本
- ・イタリア語片仮名表記の原則
- ・翻訳上の工夫

(以上上巻)

### 第3章 ボッカチオの生涯とその革新思想

- ・ボッカチオの生涯
- ・ボッカチオの生涯を日本語で知るための参考書
- ・「デカメロン」中の特筆すべき異議申し立て

### 第4章 ダンテを意識するボッカチオ

- ・具体的比較例
- ・愛の屁理屈
- ・ダンテ批判の一例

### 第5章 寛容という主張

- ・十字軍をどう見るか
- ・ジョワンビルの見方
- ・ダンテの見方
- ・地中海世界と平和共存
- ・三つの指環
- ・反ユダヤ主義の伝統
- ・レッシングの「賢者ナータン」

(以上中巻)

### 第6章 「デカメロン」に貼られた様々なレッテル

- ・艶笑小説か宮廷小説か

### 第7章 東洋文学との比較

- ・尾崎紅葉の翻案「鷹料理」と「鉢の木」
- ・ボッカチオと西鶴

### 第8章 結びにかえて

(以上下巻)

訳者はデカメロンの他ダンテの神曲も訳しているが、この解説を読んだだけでダンテも読みたくなる。訳者がデカメロンをいかに愛し、知り尽くしているのかは目次を見ただけでも分かるであろう。この他本文につけた訳者の脚注を見るだけで、訳者がどれほどイタリアを中心として中世ヨーロッパの地政学につい

での学識が深いかはすぐに分かる。以下は解説を読んだ感想である。

まず驚くべきはボッカチオの見聞の広さである。14世紀中頃は都市国家であるフィレンツェは世界（と言っても欧州、一部アフリカ）の中心で、またボッカチオ自身商人をしてナポリで貿易業務をしたこともあり、外国の事情に詳しくあった。これを受けてデカメロンの物語に複数回登場する都市は北からロンドン、パリ、ベネチア、ミラノ、ジェノバ、ボローニア、シエーナ、ローマ、ナポリ、パレルモ、アレクサンドリア等、これに加えて地中海のシシリー、サルディニア、キプロス、クレタ、ロードス等の島、さらにはチュニジアやイスラム圏に及んでいる。この時代これだけの情報を所持していたのは驚きである。

次に訳者は脚注や解説で頻繁にダンテを引用し、いかにボッカチオがダンテを尊敬していたか、或いはどの点でこの二人は異なっていたかの議論を展開する。後者について一言で言えばエリートのだんてと商人ボッカチオの差ということで片や理想主義者でキリスト教以外は認めない、片や現実主義者でユダヤ教やイスラム教も遠ざけないと言った諸例が示される。これを読んでいるとどうしてもダンテが読みたくなる。同じ訳者が神曲を訳しているの、いずれ時間を見つけて読んでみるつもりである。

もう一つ面白いのは訳者がこれを翻訳しようと考えた動機である。日本語への翻訳は昭和初期に戸川秋骨や森田草平などによる英語からの重訳で始まった。その後イタリア語からの翻訳が第2次大戦後野上素一、柏熊達生、高橋久、岩崎純孝、大久保昭男、河島英昭等々と続くが、それぞれの翻訳について触れる中で、例えばある翻訳はイタリア語に忠実なあまりフランスのブルゴーニュをボルゴーニア、キプロスをチプリ（イタリア語ではCipri）とあってどこだかさっぱり分からないといった例が充満している。話は更に飛んでアーサーウェイリーが白楽天の詩と源氏物語を全く違う様式で英語に翻訳した例なども出てくる。このほかデカメロンの英訳、仏訳に実際にあたってその間違いを指摘したりしている。訳者の語学力のすごさを感じる。この中で面白いのは西洋文学には素人の田辺聖子の「ときがたりデカメロン」を高く評価している点である。

ボッカチオ（1313-1375年）は足利尊氏（1305-1358年）と同世代で西鶴や尾崎紅葉はボッカチオとは没交渉であったにも拘わらず、デカメロンの物語と極めて類似の内容があるとして西鶴の「忍び扇の長歌」とデカメロン第4日第1話の「サレルノ公タンクレーディーの娘ギムスンダの話」、それに「後家にかかって仕合（しあわせ）大臣」（好色盛衰記）と「修道士がそれとは知らずに男女の仲を取り持つ」（第3日第3話）の類似性、更に尾崎紅葉の「鉢の木」とデカメロンの「鷹料理」（第5日第9話）の類似性を指摘している。話の筋はほぼ同じである。こうした解説を横目で見ながらデカメロン本文を読むと楽しみが倍加すること必定である。完